

跨虹橋

宗 像 正 道

(広島市消防局長)

広島市の都心の一角に縮景画という庭富がある。広島初代藩主浅野長展が、元和6年(1620年)から築成させたもので、作庭者は、現在も茶道の流派として名を残す茶人で、家老でもあった上田宗箴である。

中国杭州の西湖を模して縮景したことがその名のゆえんと言われ、園の中央に濯纓池を掘って、大小10余の島を浮かべ、周囲に山を築き、溪谷、橋、茶室、四阿などが巧妙に配置され、それらを園路でつなぐ回遊式庭園である。都心部とは思えぬ静寂や四季折々の催事と相まって、観光地として、また市民のオアシスとして、静かな人気を保っている。中学時代の学舎がこの庭園続きであったため、昼休みなどには我が庭のごとく園内で遊んだものである。

この園の池の中央に跨虹橋という、一見かたつむりに似た半月型の石橋があり、その景観を一層際立たせている。この半月型の橋は、大小さまざまな石が見事に組み合わせられてできているが、その技法、力学的なものは素人である私には分かるよしもなく、ただただ感嘆するのみである。あの原爆投下の際の爆風にも耐えたことから、その強固さは並のものではないことは実証されている。

私は消防局長として3年目を迎えている。市職員としての行政経験は30数年あるとはいえ、その大半が議会関係という稀有の職歴を持つ私にとって、これまでの消防行政は正に薄明りの道を歩む思いであった。そんな時、私は月明りに浮かぶこの跨虹橋の姿を思い浮かべ、自分の存在はこの橋の頂点で光っているひとつの石に過ぎないのだと思ってきた。この私という石を、左右から、また下から、大小さまざまな石がそれぞれの役割を担って支えてくれている。その中には、池に没して見えない多数の捨て石さえある。しかし、この一つでも欠けたなら、一見強固に見えるこの橋も瞬時にして崩壊するであろう。この石の一つひとつこそ、先輩諸氏であり友人であり、また1,100余名の部下職員達である。

議会事務局の長い経験の中で、専門分野の厳しさ、一旦事に処す際の瞬発力の必要さ、それを生み出すため、人の和の大切さを学ばせてもらった。それだけに、人を大切にすることがいつしか私の信条となった。

“人あって我あり”この白戒を胸に、記録ではなく記憶に残る存在となれるよう職責を全うしたいと思う今日この頃である。

いずれは自分が捨て石になるのだと思いながら……。